に聞く

聞き、「中海・宍道湖21世紀プロジェクト」を立ち上げた。水と共生していたはずの地域が、水に背を向けてきた現状を、正面から見据えようというものだ。

中海・宍道湖は日本を代表する汽水湖。富栄養化が進み、全国70％の生産高を誇った赤貝は全滅。名産のしじみ・しらうお・あまさぎの生息にも異変が起きている。水を力ずくで浄化するのではなく、湖底に堆積している汚泥の中の窒素、リンなどを珪藻類、動物性プランクトンの発生を促すことで資源化、生命の高連鎖をつくりだそうという構想だ。

太陽と風のエネルギーを有効に活用し、表流水と湖底水の流れを循環させる『耕水機』『動水車』の実用化を目指している。すでに岡山県の倉敷市で実用試験が行われており、中海・宍道湖でも早急に体制を整えたい。北東アジア国際プロジェクトとして関係者の組織化ができればそれが対岸諸国との友好関係はもとより、この地に起きている困難な社会問題の解決にもつながると確信している。

上下水道管理コストの大幅削減を実現する『やくも水神』

好評のマンホールポンプ管理システム

あらゆる業界からの新規需要も多い『門番』

研究所
創造機関に

平和の再定義』。いうまでもなくわが国は食料、原材料、エネルギー資源などのほとんどを外国に依存している。平和でなかったら日本はどうなるのか、自明だ。もう一つ、平和は戦争の悲惨さや悲劇を知ることはもと

竹島に平和祈願像の建立を

より、国内外の過去の戦争に至る背景、きっかけ、経緯を学ぶことから平和への道筋が見えてくるのでは。これが私の持論。日本が戦争し、加害・被害者になった近代史を国内外の視点から学習すれば本質が観えてき、今何をなすべきか分かるはず。

〝事業〟のイメージを確立、具体的な実行プランをつくるべく94年「人間自然科学研究所」を設立、昨年財団法人化した。実績を紹介すると、治山治水の偉人を発掘、書籍の発行、銅像の建立・シンポジウムなどを中心とした「一村一志運動」。鳥取県につくられた日本一の中国庭園『燕趙園』への03年10月孔子、孟子像建立（孟子像は日本で初めて）。この銅像の制作は日中国交正常化30周年を記念して、毛沢東・蒋介石両軍の国共合作で有名な日中戦争激戦地、台児荘記念館で心の昇華を祈願、郷土の治水の偉人周藤彌兵衛、清原太兵衛、両銅像と共にこの地で造った。

また、今を生きるアジア・日本・島根県人の一人として正面から取り組み96年11月、中海干拓中止、跡地活用実行プランを提案。02年1月、日韓両国で激論になっている日本海・東海、称呼問題、竹島（独島）領有権問題にも、日本海（東海）の名称を「中海」に、島根・鳥取県境の中海を「日本海」への名称入れ替えを提案。また99年『太陽の國ＩＺＵＭＯ』で発表した朝鮮戦争を人類最後の総力戦にすべく、民族衣裳をまとった戦争関係国の女性と地球をモチーフにした『人類恒久平和祈願像の建立』を提案。切手・シールの発行活動もすでに動き出している。

また中国山東省の一流ホテルを手始めに北京オリンピックを目指して日中英訳『論語』を置くことを計画、すでに省政府への申し入れを終えている。中国、韓国での友好・昇華事業や、「健康・環境・平和」祈願施設の建設など、構想もだんだん具現化の方向に向かっている。一連のこれらの活動が評価され、03年11月孫子の故郷中国山東省東営市から『戦わずして初期の目的を達成する平和の知恵者・孫子』の銅像をいただいた。

―「人間自然科学研究所」と小松電機産業との関係はどうなのでしょう。

小松　この研究所は混沌（こんとん）の時代にあって、人間と自然と科学のかかわり合いの中で、未来を拓く知価創造のための機関として発足した。端的にいえば、これまで活動の柱は小松電機だったが、オーケストラに例えるなら、これからは研究所が指揮者。小松電機は事業の一つのコアになる演奏者。小松電機と並列にステージに立ち、演奏するのは「異業種協同組合テクノくにびき」の加入各社および賛同諸団体個人。同じ目的を持って異なった目標、役割分担する組織・集団を目指している。さらに、小松電機の分社化などで奏者が増え、機能分担が進んでいくだろう。

持続可能な社会へのパスポート
一隅を守り千里を照らす

―だんだん哲学的になってきましたが、小松社長のいわれる『中庸』の経営とはどんなものなのでしょうか。

小松　中国古典の四書（大学・中庸・論語・孟子）の『中庸』では「偏（かた）らざるをこれ中といい、易わらざるをこれ庸（よう）という」。自分が置かれている環境を肯定し、現在に至るまでの縁のあった人とたくさんの知らない人々の支えによって現在の自分があり、自然と歴史の中に生かされていることを自覚（感謝）。人類の特性を考察する中から究極の論理的・合理的目的に目覚め、環境・健康・平和という観点から自分の一生で達成できない目標を3個以上イメージ。それに向かって節目をつくり、状況に応じて臨機応変「生かされながら生きる（生命は有限。命は無限）」と解釈している。中心から大きく外れず自立復元、すなわち『和道』。一病息災から覚醒（智恵）と蘇生（生命）の循環が起こる場で幸せを感じられる人の輪が広がることになる。

経営とはこのことの実社会での実践。「経」は道理の追求。「営」は行う場所。具体的には一つの「目的」と三つ以上の「目標」が必要。人類究極の目的「天寿をまっとうでき、人々が楽しく生きられる持続可能な社会を築くメンバーの一員と自覚できること」だ。混迷期の指導者は空間と現在・未来の時間の中に矛盾のないイメージ、ストーリーを描き、分かりやすく示さなければ、人々は今何をなすべきか見えてこない。

化学物質と工学テクノロジーによる国家間戦争の世紀が終結した。これは映画、メディアにより人類史上、例のない膨大な犠牲をだした核の破壊力の世界的認識ができ、その後、軍需技術として発達した双方向デジタル通信・衛星テレビ放送、そしてたくさんの人々の英知と努力のおかげである。その後、台頭してきた中東問題・朝鮮半島問題。そしてウイルスによるＯ―157、ＳＡＲＳ。生存にとって必要不可欠な食を脅かす牛・鯉・鳥などからの脅威は、持続不可能な膨張の時代から持続可能な発展の時代への転換を人類に告げているとも考えられる。これらのことと、この地域の地政学を学ぶ中から日本そして中海・宍道湖圏に「天の時」「地の利」すなわち人類史上の大きな役割がまわってきたことが理解でき、世界大量空輸・軍需技術から開放されたインターネット・双方向映像コミュニケーションテクノロジーなどを生かせば、私が準備してきたことと相まって共感・納得・行動できる「人の和」が生まれ、新しい時代の幕開けになると確信している。

―最後に、1981年に制定された社是は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」ですが、経営理念の「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」はユニークですね。

小松　衣食住が足りない時代につくられた『論語』の中に『学んで「知ってやる人」は「好きでやる人」にかなわない。「好きでやる人」はこれを「楽しんでやる人」にはかなわない』とある。人類は衣食住がたったあと、長年の化学物質の影響を受けた空気・水・食料の中で暮らしている。これらを科学的に克服することを模索すると共に「おもしろ、おかしく、たのしく」その上に「愉快」をとことん論理的に追求・軌道修正しながら（生涯学習の必要性）生きる以外に自分と周りの人も含めて、幸せを感じながら天寿を全うすることはできない。『人類は地球上で唯一つの解釈を「する」「できる」生命体』。生命が超論理的であることからすれば、解釈に論理的整合性をとらないと、致命的な病気と不幸がその人の周りに忍び寄ってくる。このことが社会に大きな影響を及ぼす『政・官・財』の要職に就いている人々に理解されていないことが、ガン患者、難病、ボケ、自殺の急増、若い人の生命力低下、少子高齢化などが重なり閉塞感から利那主義がはびこり、未来に対するいい知れぬ不安、そして戦争につながる要因となっているのでは。

最後に、2人の先達のメッセージをお伝えしたい。

アルバート・アインシュタイン博士（1922年来日講演）

「世界は進むだけ進んでその間、幾度も闘争が繰り返され、最後に闘争に疲れるときがくるだろう。その時、世界人類の平和を求めて、世界の盟主をあげねばならぬ時が来るに違いない。その世界の盟主は武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を超越したもっとも古く、かつ、尊い土地柄でなければならぬ。世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰り、それはアジアの高峰、日本に立ち戻らなければならぬ。われらは神に感謝する。天がわれら人類に日本という国を創っておいてくれたことを」

「世界の大統領・首相経験者でまとめられた人間の責任に関する世界宣言」第11条（1997年）

「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任を持って使わなければならない。経済的および政治的権力は、支配の道具としてではなく、経済的正義と社会的秩序に役立つように使われなければならない」

―長時間ありがとうございました。